

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	渡辺 優子
学位	博士(学術)
学位記番号	新大院博(学)第88号
学位授与の日付	平成30年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	幼児のわらべうたの歌声分析からみる歌唱表現の特性

論文審査委員	主査	教授	伊野 義博
	副査	准教授	森下 修次
	副査	准教授	杉澤 武俊

## 博士論文の要旨

本研究の目的は、幼児がわらべうたを歌う時に、幼児に内在して用いられている手がかりについて明確化することにある。目的を達するための方法として、幼児、特に5歳児がわらべうたを歌う音声について、音高や音程等の特徴を把握し、分析を行うとともに、先行研究の成果に依拠しつつ、5歳児の実際の歌声から、5歳児が内的に構築しているわらべうたの枠組みや、歌うために用いている方策を導き出している。

論文は、第1章において、研究の目的と意義を示した後、研究方法として、文献研究と実験的調査研究とを合わせつつ進めることを述べ、特に実験的調査においては、幼児の短期記憶再生音声の分析法について検討している。

第2章では、研究のバックボーンとなる幼児期の発達について、言葉の発達、社会性と感情の発達ならびに音楽的発達の3項目から文献研究を行い、先行研究の整理をした。特に5歳児がわらべうたを歌う時に、5歳児に内在する手がかりとしての幼児の音楽スキーマについて検討し、日本の子どもが、欧米の音楽手法による子どもの歌とわらべうたの両方を日常的に歌っているため、場面によって音楽スキーマを使い分けていること、すなわち、西洋音楽の調性感覚とは異なる旋律の枠組みについての知識(音楽スキーマ)を持ち合わせていることを推測している。

第3章では、わらべうたの先行研究から文献研究を行い、わらべうたの定義や音楽的特徴についての知見をまとめた。本研究においてはわらべうたの音楽的構造についての成果を踏襲しつつ、子どもの歌声分析に基づいた検討をすることを述べた。

第4章は、実験的調査研究の実際とまとめであり、論文の核となる部分である。ここでは、幼児、特に5歳児がわらべうたを歌う音声の特徴を把握するために、短期記憶再生音声に着目した実験的調査を2件行った。その際得られたデータから、基本周波数の抽出や音程の評価などを行い、5件の分析を行い、その結果と考察をまとめている。

これらの調査から、次のような5歳児の短期記憶再生音声の特徴があることが浮かび上がった。

- ・ 全体的に原曲より低めに歌うが、旋律の方向性はつかむことができる。音程と基本周波数の差の関係から見ると、平均律の音程幅よりも狭く音程を取る傾向がある。
- ・ 言葉のまとまり（句）ごとに、その前の音に近い適宜な音高から歌い始める。音程を確定すると、同音、あるいは長2度の上行が多く見られる。
- ・ 言葉の高低アクセントが旋律の動きに影響を及ぼす。
- ・ 2度音程の終止の場合、長2度下がってから、長2度上行して終止音となる場合が多いが、下降する音程に比べて、終止音に向けて上行する音程がはっきりしない傾向がある。
- ・ 原曲に比べ同音で歌うことが多い。
- ・ メロディーラインの変化、撥音を一つのモーラとして、音価と音程を与えるなど、個々には様々な表現が見られる。

以上の結論と先行研究をもとに、第5章においては、幼児に内在しているわらべうたを歌うために用いられている下記5通りの方策を帰納的に導き出し、これらの方策の総称として「わらべうた歌唱スキーマ」を提唱した。

方策1：言葉の高低アクセント（ことばのまとまりごとに、その前の音に近い適宜な音高からはじめる等）

方策2：同音で歌う（原曲に比べ同音で歌う）

方策3：言葉の抑揚（上行音声と下降音声のイントネーションの違いが影響する）

方策4：3音旋律や4音旋律（短3度を含む3音旋律や4音旋律を使う）

方策5：言葉のニュアンスによる音高変化（撥音を一つのモーラとして、音価と音高を加えることや、1音の中に音高の変化をつけることで言葉のニュアンスを表現する）

#### 審査結果の要旨

本論文は、幼児の音楽的能力の発達について、とくにわらべうたの歌唱に焦点をあて、幼児に内在して用いられている手がかりについて、主として実験的調査研究の手法を用いて探究し、明らかにしようとしたものである。

幼児の音楽的発達、特に歌声についての分析的研究は少ない。本研究は、わらべうたとその背景としての文化、日本語との関係に着目し、実験的手法により、その様態を明らかにしようとするものであり、この種の研究においては、貴重な位置づけと言える。

論考の全体は、第1章で研究の目的と意義、研究方法を明示し、第2章では、幼児の発達についての先行研究をまとめつつ、「音楽スキーマ」を示唆に、本研究の結論としての「わらべうたスキーマ」を推測させている。続く、第3章では、わらべうたについて、本研究の分析で必要となる音楽構造を明らかにした。第4章では、一定条件のもとで幼児にわらべうたを教え、録音し、幼児の短期記憶再生音声について、詳細な分析を行っている。実験的調査1-1において、3歳児10人、4歳児10人、5歳児10人の音程と音量について、判定者による点数評価を行い「3歳児と4歳児の短期記憶の特徴」「5歳児と3歳児のグループ歌唱における違い」

等から分析を行った。実験的調査1-2では、5歳児10名のうち全曲を歌った6名のデータ分析について基本周波数を導き出すことにより行った。これらの結果をもとに実験的調査2では、他の環境下にある5歳児36人のデータ分析に移る。人数と評価のポイントを増やして同種の検証を行った。実験的調査2-1では、基本周波数を確定し、音高と音程の観点から分析、短期記憶再生の特徴を導き出した。さらに実験的調査2-2においては、音程の観点から再度検討している。そして、実験的調査2-3では、子どもの示した個別の変化に富んだ表現について、これまでのデータを用いて検証した。これらの結論から第5章において、前記「わらべうた歌唱スキーマ」を導きだしている。

このように本論文は、論理的な構成が整えられ、実験的な研究手法も確かなものとなっており、その内容も個々のデータの分析と結果から次なる課題を導き出し、さらに細かく検証を重ね、多角的に実証していくもので、優れたものとなっている。従来、わらべうたの旋律構成や日本語との関係などの先行研究は見られるが、実際のところ子どもがどのように歌っているのか、子どもの内的なものがどのように表出されるのかについて、子どもの実際の歌唱から導き出された研究は、見当たらない。

本研究で得られた5歳児の短期記憶再生音声の特徴は、これまでの先行研究では、明らかにされてこなかったもので、幼児の歌声の発達、とりわけわらべうたに内包されている日本語を歌う行為とその意味について、伝統的な歌唱との関係も含め研究を推進するための貴重な成果と言える。

また、本研究で最終的に提案された「わらべうた歌唱スキーマ」については、これまでの幼児の音楽的発達研究に新たな視野を提供するものである。音楽的スキーマについては、種々の研究があり、幼児のそれに関しては、輪郭的スキーマや旋律的スキーマについてのいくつかの研究が見られる。本研究は、これに「わらべうた」すなわち日本語や伝統的な歌唱ともつながる日本の子どもが内在する文化的背景に着目し、新たな知見としての「わらべうた歌唱スキーマ」として提案するもので、価値あるものとなっている。

なお、筆者も指摘しているところであるが、本研究は、わらべうたの特質を考慮し、グループで参加できる環境を設定したこと、そのために時に音声分析を困難にしたこと等、環境設定に関する課題があげられている。また、5歳児という限定された対象の研究であり、3歳児や4歳児、あるいは5歳児以降のさらなる検証が期待される。

以上のことから、本論文は、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。